



慶應義塾大学病院リハビリテーション科

辻 哲也先生

慶應義塾大学医学部リハビリテーション医学教室 教授 教室主任/診療部長

研究のできる臨床医を目指し
全国から若手医師が集う

教員が約 100 人という大所帯の慶應義塾大学医学部リハビリテーション医学教室。さらにそのうちの 65% が医師歴 10 年未満の若手医師で構成されており、新専門医制度の基本領域化に伴い、リハビリテーション科に魅力を感じて入局する若手医師が増えたそうです。

「指導医の資格をもつ医局員が約 4 割いるので、若手が多くても指導者は十分おり、手厚く人材育成を行っています。月に 1 回は教育関連施設勤務の医師も含め、医局員全員が集まり、勉強会を開催しています。大学全体として『Physician Scientist』であるべきという理念が定着しているので、若い頃から『研究のできる臨床医』を目指してもらっています。優れた成果を発揮した若手を表彰する『レジデント・オブ・ザ・イヤー』も設けており、大きな刺激と励みになっています。女性医師も全体の 35% おり、比較的女性が多い教室といえます。また他大学出身者が約 8 割を占め、全国各地から入局するため、風通しもよく、人脈や医師としての視野も広がります」と教室の雰囲気について説明する辻哲也先生。

がん、神経、再生医療、3つの柱
ーリハビリテーション医学・医療への
期待も大一

教室が重点を置く 3 つの柱として、がん、神経、再生医療を掲げているそうで、「病院としてがん医療に積極的に取り組んでおり、腫瘍センターも充実しているので、年間 12,000 件以上のがん患者に対してリハビリテーション治療を実施した実績があります。神経生理学や運動生理学、脳科学を治療に応用するニューロリハビリテーションの研究も盛んです。また本学の生理学教室や整形外科教室との共同研究で再生リハビリテーション医療の研究も進んでいます。特に急性期や慢性期の脊髄損傷に対する iPS 細胞を用いた創薬や再生医療の研究で



辻 哲也先生

慶應義塾大学病院
リハビリテーション科

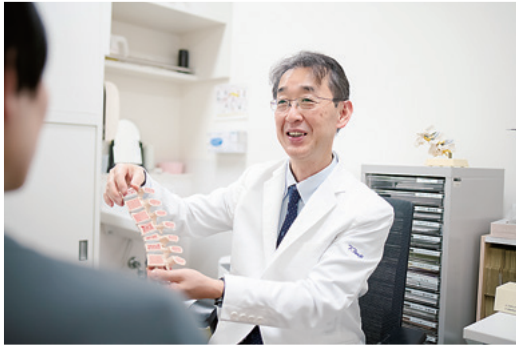
病床数：950 床、スタッフ構成（常勤）：医師 14 名（うち指導医 4 名、専門医 3 名、専攻医 6 名）、理学療法士：19 名、作業療法士：4 名、言語聴覚士：4 名（2024 年時点）
〒160-8582 東京都新宿区信濃町 35

も、リハビリテーション医療が有効であることが検証されつつあり、再生医療におけるリハビリテーション医療が担う役割の重要性に注目が集まっています」とリハビリテーション医学・医療研究のもつ大きな可能性について辻先生は説明してくださいました。

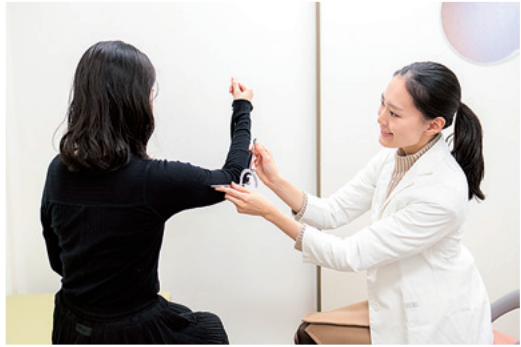
教室の歴史は古く、1966 年にリハビリテーションセンターが発足、1980 年にリハビリテーション科が開設、1992 年にリハビリテーション医学教室が開講し、これまで 200 人以上のリハビリテーション科専門医を輩出してきました。辻先生ご自身は、1990 年に慶應義塾大学医学部を卒業後、リハビリテーション科に入局したそうです。

「学生のときに、各科に配属されて研究を行う“自主学习”というカリキュラムでリハビリテーション科を選択したのがきっかけでした。教室の先生方は新しい分野にチャレンジしようという熱意にあふれた方々ばかりで、そのような環境の中で徐々

辻 哲也



診察室：和やかな雰囲気の中で、辻教授が患者さん（模擬患者）に丁寧に病状の説明をしている様子



診察室：レジデントが熱心に患者さん（模擬患者）の関節可動域計測をしている様子



リハビリテーション室：大学院生と研究員が片麻痺患者さん（模擬患者）の歩行分析を行っている様子



リハビリテーション科全員集合：リハビリテーション科医師，理学療法士，作業療法士，言語聴覚士ほか

に感化されたのだと思います。その後、2002年に静岡県立静岡がんセンターリハビリテーション科へ赴任して開院準備にあたり、“patient-oriented”の理念のもとで、多職種チーム医療を経験する中で、リハビリテーション医療に対する期待が大きかったことが私の背中を押してくれました。そして周囲の先生方の温かいサポートで、高度がん専門医療機関であるがんセンターにおいて、がんリハビリテーションの先駆的な取り組みを始め、着実に発展させることができたことが大きな自信になりました」と当時を振り返ってお話しされました。

社会貢献を信条に 東京都 JRAT 代表として 能登半島地震の際にも活躍

辻先生が仕事をするうえで心がけていることは「社会貢献」だそうです。その言葉どおり、東京都

災害リハビリテーション支援関連団体協議会（通称：東京都 JRAT）の代表を務め、今年1月の能登半島地震の際も、医師・リハビリテーション専門職の派遣を通じて、被災地支援を行ったそうです。

「社会のためになる選択をすることで、自分自身の視野も広がり、成長できると信じています。リハビリテーション医学・医療は、既存の医学で扱われてこなかった“障害”にアプローチする新しい医学領域で、まだまだ手つかずの分野が多くあり、私自身も日々、新しいことに興味を引かれ、さまざまなプロジェクトにわくわく感を抱いています。そして個性と多様性が尊重される開かれた環境の中で、生き生きと意欲的に診療・教育・研究に取り組める魅力ある教室を目指しています」と最後に辻先生は今後の抱負を述べてくださいました。

（文責 広報委員会）